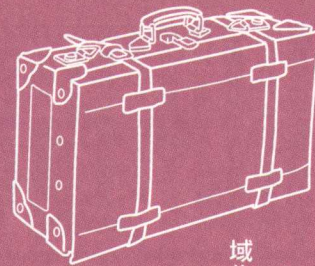


ツリーズム

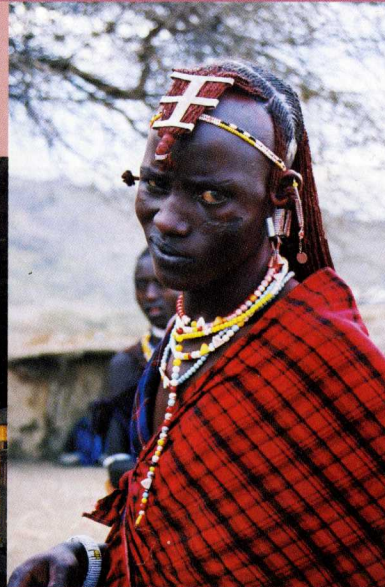


メディアの発達で入手できる情報量も増え続け、世界各地ではあらたな観光時代をむかえている。それは観光の実質とは違う「幻想」を求める旅であったりする。

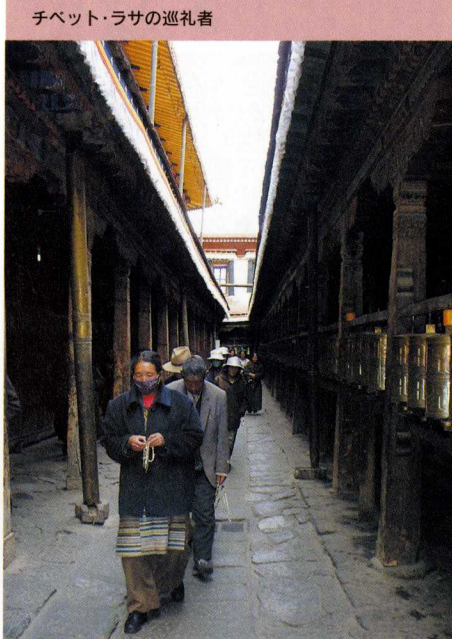
人はなぜ旅をするのか。特集では今の観光の特色、さらに地域住民のかかり方の変化にも注目したい。



ソウルのショップ



マサイの戦士



チベット・ラサの巡礼者

「観光」という名の幻想

山村 高淑
(やまむら たかよし)

京都嵯峨芸術大学助教授

マンガの国、日本へ

昨年の六月末、一六歳のフランス人少女二人がパリから列車の旅を続け、ポランドからベラルーシに出国しようとしたところを、ビザ所持の理由で国境警察に拘束された。仏紙リベラシオンが伝えた小さな記事である。良くあるニュースと思いきや、旅の動機を知って驚愕した。じつは、彼女たち、陸路日本を目指していたのである！日本の漫画やビジ

ユアル系バンドの大ファンで、その発元の日本に行こうと思いついたという。朝鮮半島までの陸路は鉄道を乗り継ぎ、海は船で渡ろうと計画していたそうだ。

一方、昨年のゴールデンウィークに中国は杭州で開催された「中国国際動漫節（アニメ・漫画祭）」は、六日間の会期中に約二八万人の来場者を数えた。なんとこの数は同年の「東京国際アニメフェア2006」（会期四日間）の約三倍である。さらにこの「動漫節」ではコ

スプレ（コスチュームプレイ）イベントがおこなわれ、全中国から多くの若者が集まり大盛況を博した。中国の若者たちが、日本のマンガ・アニメの登場人物になりきっているのである！

さて、人はなぜ、旅に出るのだろうか？フランス人少女に、あえてユーラシア大陸横断の旅を決心させたものは何なのか。あの広大な中国で、若者を杭州に集寄せたものは何なのか。

「コスプレ」なのである。一体全体、我々はこの旅をどう理解すれば良いのだろうか？

「幻想」という物語

通常我々は観光という行為を、「本物」を見たり、「現実」を体験したりすることであると考える。しかし、じつはそうではなく、観光とは「幻想」に浸りに行くことなのである、ということをご存じの方の出来事は教えてくれる。我々はローマのコロッセオの前で、案外、建築としてのコロッセオを真剣に見ているわけではない。オードリー・ヘップバーンやグレゴリー・ペックに自らを重ね合わせたりしているのである。

この世界は、いかなれば元素が配列されただけの物質世界であり、それ自体に意味は無い。我々がそこに物語をもたせるからこそ、世界が意味をなすのであり、我々の存在も位置付けられる。我々は旅をおして「幻想」という物語に浸り、無意味な世界に意味をもたせる作業をおこなっているのである。

これは、実体の無い「神」というものを感じに行く「巡礼」と本質的に同じ行為である。一部のアニメファンが秋葉原に行くことを「アキバ詣」とか「聖地巡礼」とよぶのも、そうした旅の本質に無意識のうち

我々はあらたな観光時代に突入した。インターネットなどメディアの発達により、人類がアクセスできる情報は爆発的に増大し、観光において消費されるべき幻想はますます肥大化する。この傾向は、今後、観光資源の考え方や観光産

業の形態を大きく変えていくことだろう。上述したような若者の旅の例はそのごく一例に過ぎない。

しかし、どんなに資源の考え方や産業の形態が変わろうとも、世界に意味をもたせ、自己を認識するという、精神的欲

求としての旅の本質は、我々が人類である以上、これらも不変である。なぜなら、それは人類が自己という意識をもつたときに同時に背負った業だからである。



「アキバ詣」の女子大生。メイド服でのプリクラ撮影が旅の目的という

香港映画「恋する惑星」のロケ地。日本人にも人気の観光スポット



ローマのコロッセオ。半世紀を越えてなお根強い人気の映画「ローマの休日」のロケ地

日本人の旅の心根をめぐって

目崎 茂和

(めざき しげかず)

南山大学教授

神仙との出会いを求める

日本人の旅、とくに庶民の旅のはじまりは、世界に類例のない「伊勢参り」や「おかげ参り」にそのルーツが求められよう。日本人ばかりか、現代のマスツーリズムの起源でもある。中世末期にはじまる伊勢参りの旅は、とくに江戸時代に入り、街道・海路の整備もあり、御師(エージェンツ)に世話され、全国規模のネットワークの「講」グループによる旅のシステムである。

さらに歴史をさかのほれば、中世の法皇や上皇らの「熊野詣」、京から熊野三山や浄土世界への参詣が、日本人の旅の原風景でもあろうか。旅と寺社参詣・聖地めぐりは、日本人の旅立ちの原点である。二〇〇五年に、熊野三山を含め「紀伊山地の霊場と参詣道」として、世界遺産に登録された。いわゆる「熊野古道」自体



世界遺産登録で蘇った「熊野古道」(伊勢路・尾鷲市)

「伊勢参り」の内宮・宇治橋では、冬至の日の出が参拝できる

が指定されたのは、スペインのサンチャゴへの巡礼路について、世界で二例目である。伝統的な旅のプロセスとしての、ルートである困難・試練をとまなうような「道中」「道行」が、とりわけ認識された意義は大きい。

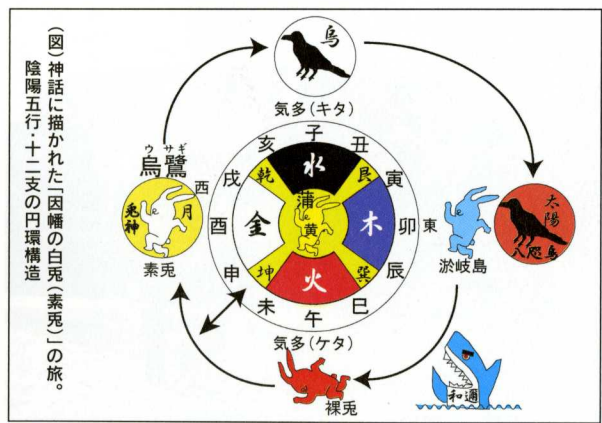
ところで「おかげ参り」の伝統は、毎年の正月の寺社への初詣・初日の出などで、その片鱗や残照がうかがえる。なお、感謝の気持ちをあらわす「お蔭さま」「お陰さまで」とは、「御蔭祭」「みあれ祭」での神の出現、神仙との出会いで、その「陰影」を見たことから、このことばの由来といわれ、日本人の旅の心性や精神性を考える、キーワードかもしれない。

神話の中の旅

『古事記』など神話に描かれた旅を分析してみると、日本人の旅の心性、精神性がより理解できるのではなからうか。大國主命の若い時(オホナムチ)の初旅といえる「因幡(稲羽)の白兔」を事例に考えてみたい。

この神話は、オホナムチの旅(東行)ばかりか、兎の旅(南行と西行)のふたつの旅が交差・重層する構造をもつ物語となっている。オホナムチの旅は、因幡の八上比売を競い合って娶るため、多くの兄弟の八十神たちにしたがって大きな袋をもち、出雲から東の因幡への旅の道中

この「因幡の白兔」の旅は、図に示すように、十二支の卯(兎・東・青)が、陰陽五行(木→火→土→金)の順にめぐり、兎神(月神)になるもので、時空間の変遷が、日・月のように東(陽・木・卯)→西(陰・金・酉)に移動する再生循環を、象徴する神話でもある。



目崎原図

日本人の旅の根底には、この神話が物語るように、「熊野詣」や「伊勢参り」と同様に、若き旅で、その苦勞を乗り越え、神の加護で再生した後、この託宣を授けられるような神にもなれるという、陰陽五行の循環論的「黄泉がえり」「生きている道」精神が脈打っているのではなからうか。

韓流ツアーから見る旅の類型

林 史樹

(はやし ふみき)

神田外語大学専任講師

韓流の集客力

近年、「韓流」をテーマにした旅行がブームとなっている。ドラマ「冬のソナタ」(以下、冬ソナ)の舞台となった春川・南怡島はもちろん、ロケで用いられた高校まで観光客が訪れる。各地では、ドラマを記念したミニユメントが作られ、付近にはにわか俳優の写真やカレンダーを販売する店ができた。冬ソナのロケ地を中心にこのような韓国旅行を、一般に「冬ソナ観光」とよんだりもする。冬ソナ観光は、ロケ地を追うばかりでなく、一般の韓国観光もセットになつていて、ところが通常のロケ地ツアーと異なる点と考えられる。

これらの観光がもたらす経済効果は大きく、二〇〇六年一月二十九日から濟州島の西帰浦市濟州コンベンション

センターで開催された「韓流エキスポ in ASIA」には、四〇〇〇人を超える日本からのファンが開幕式に訪れたといわれる。今回の韓流エキスポだけでも、七五〇億ウォン(約九三億九八〇〇万円)が見込まれている。

実際に、韓流の集客力は絶大であった。二〇〇五年の春先にロケ地であるソウルの中央高校に行くと、正門横の駄菓子屋が韓流グッズを販売し、正門向かいでも仮設店舗でグッズを並べていた。わずか二〇分ほどのあいだに小型マイクロバスが二台もきた。ツアー客である。

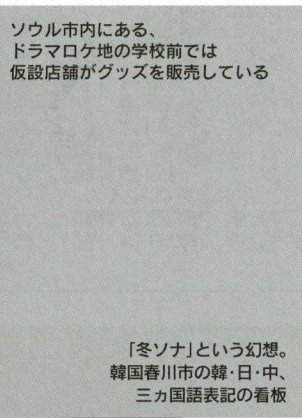
東京から釜山行き飛行機を予約したときも、オフシーズンにもかかわらず、空席待ちといわれたことがある。春川に行くにはソウルに近い仁川国際空港が便利にもかかわらずである。少し日程をずらして釜山に行ったが、改装した釜山の金海国際空港の待合には書店があり、ポスターやカレンダーなどの韓流グッズを販売していた。後方で搭乗時間を待っていた女性グループが買い足りないといいつて、それらをあさる光景を目にした。

疑似イベントの旅

それでは、韓流ツアーはどのような旅といえるのだろうか。旅の目的には、①自分探しにつながる「オーセンティシティ

(本物のもの)の追求」と、②既知の場所を再確認する「疑似イベント」の旅があるといわれる。韓流ツアーに、憧れの人物に同化した、憧れの人物がいた場所に身を置きたいというのがあるとすれば、前もって写真などで素敵と思つた場所に自分を置くことで満足する、一種の疑似イベントといえるかもしれない。しかし、

疑似的体験をえるための対象は「動く」のである。つまり、人物を求めて動くため、訪問先は必ずしも特定されていない。これは、名所巡りを想定しがちな「観光」に含まれるのか、疑似イベントの派生型なのか。韓流ツアーから旅の類型をふと考えてしまった。



ソウル市内にある、ドラマロケ地の学校前では仮設店舗がグッズを販売している

「冬ソナ」という幻想。韓国春川の韓・日・中、三カ国語表記の看板



만남의 광장

出会うの広場 相約之所

「冬のソナタ」撮影地「冬季恋歌」拍攝地 春川市 www.chuncheon.go.kr



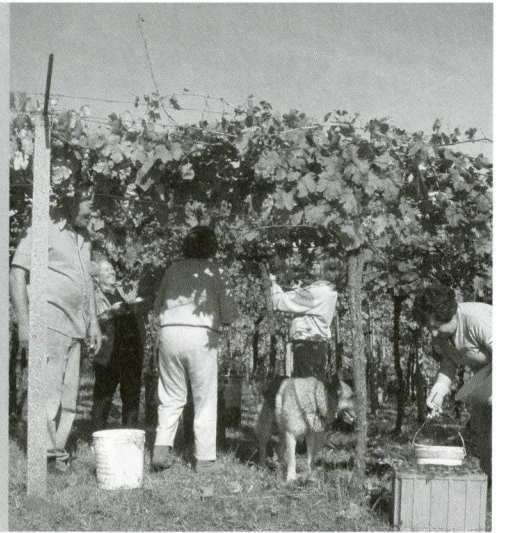
ソウル市内にある、ドラマロケ地の学校前では仮設店舗がグッズを販売している

「冬ソナ」という幻想。韓国春川の韓・日・中、三カ国語表記の看板



2005年春にJRで売り出され、人気を博した冬のソナタ弁当

特集 ツーリズム



もう一つの観光？ —イタリアの アグリツーリズム—

宇田川 妙子
(うだがわ たえこ)

本館先端人類科学研究部

ブドウの収穫の
農業体験ができる(ローマ近郊)

イタリアといえば、政府観光局も自負するように「文化と歴史の国」として世界各地から多くの観光客を集める観光国だが、そんななか近年注目されつつあるのが、アグリツーリズムである。
アグリツーリズムとは、農業(アグリコルトウーラ)

と観光(ツーリズム)が合体したことばで、その名の通り、農家がおこなう観光サービスのことである。たいは使わなくなった土地や畜舎小屋などを利用して宿泊施設を作り、自分の農園で作った野菜やワイン、乳製品などを用いた食事を提供している。さらには農業体験、料理教室、乗馬やトレッキングなどのスポーツや娯楽を企画するところもある。

このため、ゆったりとした時間と自然のなかで、農家の人々と直接ふれ合いながら地元の料理や生活を楽しむという趣向が話題を呼び、最近では口ハスやスローフードなどのブームに乗って客が増え、日本からも観光客が訪れるようになった。
とはいえ実態は、こうしたイメージとずれることも少なくない。というのも、アグリツーリズムとは、法的にはあくまでも農家の副業として規定されたものだからである。観光サービスからえる収入が農業の収入を超えないという条件もある。

そもそもアグリツーリズムは、一九八〇年代半ば、衰退が進む農業への支援策として始まった。そして、農業の維持は農地の劣化を防ぎ、環境保護や地域の活性化にもつながると考えられ、奨励はさらに進んだ。もちろんアグリツーリズム農家のなかには、もともと環境問題や有機栽培などに関心をもっていたり、町おこしの中心人物として活動してきた者もいる。しかしその一方で、ビジネスチャンスのひとつとしてとびついたものの、うまくいかず撤退する農家も多い。

観光をとおして農業の維持・発展、環境保護、地域活性化という一石三鳥を狙おうとするアグリツーリズムに、総合的な評価を下すのはまだ早い。ただしこの観光形態が、たんなる消費主義的なムードの田舎生活の提供ではなく、地域に根ざし、むしろ生産者側が主体となった試みであるということは、そこを訪れる我々も彼らの生活を知りたいならなおさらもっと評価すべきだろう。

マサイ村の エンターテインメント

岩井 雪乃
(いわい ゆきの)

早稲田大学平山郁夫記念
ボランティアセンター客員講師

赤い布をまとった長身の戦士が、槍を片手に空高くジャンプする。そんなマサイの姿は、数あるアフリカの民族のなかでもっとも有名だろう。マサイの人びとは、このイメージを観光資源として有効に活用して「観光マサイ村」を作っている。ここでは、実際に生活している集落を観光客に開放しているのだ。お金を払ってなかに入ると、牛糞で塗り固めた家のなかを見学したり、戦士や少女の歌や踊りに参加することができる。最近ではホームステイプログラムを実施しているところもある。

とはいえ、決して観光客に媚びないのがマサイらしいところだ。わたしがタンザニアのンゴロンゴロ自然保護区のマサイ村を訪れたときのこと、観光客のためのダンスのほが、戦士同士の真剣勝負になってしまったことがある。マサイの戦士にとって、より高く跳べることが強さの象徴だ。大地のエネルギーがはじけ出るように、次々と宙に舞う彼らのダンスは圧巻だった。しかし、跳んでいるうちに彼らは本気になってきて、真

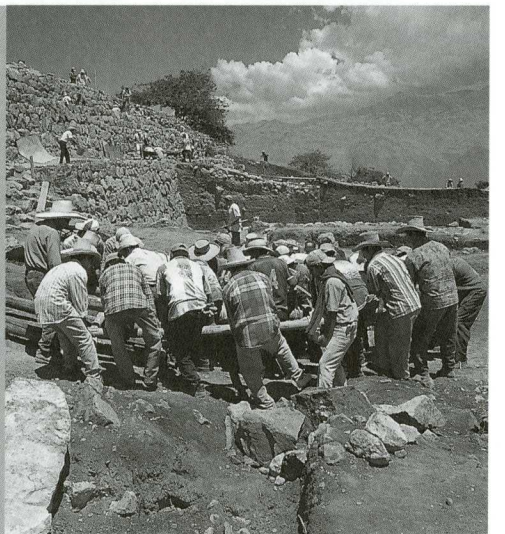
剣なジャンプ競争が始まってしまった。やがてわたしたちの存在は忘れられてしまい、ジャンプに陶酔する戦士たちを後に、わたしたちはすこすこと退散するしかなかった。

伝統生活を観光に提供しているマサイだが、近代的な生活と隔絶して生きているわけではない。マサイ村から少し離れた観光客の行かない集落では、ピリヤードに興じるマサイたちの姿がある。二年ほど前に入ってきたこのゲームは、すぐに大流行した。携帯の普及も目ざましい。サバンナでも電波が入る地域が年々拡大しており、牛を放牧しながらの通話が可能になりつつある。

急増しているタンザニアの観光客と発達する情報網を背景に、彼らの観光へのかかわりは変わっていくのだろう。エンターテインメントとして、洗練される方向かうのだろうか。しかし一方で、あの内輪で楽しむ気持ちを手放さないでほしいものだ。



観光客の男性には棒、女性にはビーズ飾りで歓迎



住民参加型の ペルー遺跡観光

関 雄二
(せき ゆうじ)

本館研究戦略センター

ユネスコの日本信託基金による
クントゥル・ワシ遺跡保存プロジェクト

ラテンアメリカ各国では、近年、住民参加型の持続的観光をとおして貧困解消を図ろうという動きが出てきている。古代アンデス文明の中核地であるペルーでも、遺跡などを核に、これを推進しようとしている。その先鞭をつけたのは、我々日本調査団である。

わたしが所属する調査団は、日本各地の大学や研究所の文化人類学者が寄り集まって、毎年、ペルーで発掘調査を実施している。ここ十数年携わってきた、北高地のクントゥル・ワシという大規模な神殿の調査では、偶然にも、大量の金製品を副葬した墓に遭遇し、出土品の帰属をめぐる騒動に巻き込まれた。国が、県が、はたまた地元の村に置くべきか、さまざまな議論が渦巻くなかで、我々と村人が選択したのは、博物館を遺跡の麓に建設し、そこに出土品を納めることであった。資金は、日本で開催した展示会で集めた協賛金や寄付金を充て、完成後の運営は、地元の村に作られたNPO組織に委ねたのである。

遺跡周辺で暮らす住民が盗掘に手を染めることの多いアンデスで、住民自らが遺跡を守り、出土品を管理することは、稀なケースである。彼らの努力は、その後、上下水道や電気などのインフラ整備に結び付き、国連開発計画からも注目されることになる。また、この活動を聞きつけた各地の自治体からの講演要請は村人の自尊心を高め、これが遺跡保存への意識へとフィードバックされた。一方で、我々もユネスコや日本から援助を導き、遺跡保存や博物館改修を実現し、観光資源として整備することに努めてきた。

遺跡を掘れば、必ず何かが出てくるし、また出てきたものは、場合によっては、研究者の手を離れて、観光など別の脈絡の中で意味付けがなされる。情報のグローバル化と途上国に強要される新自由主義経済の波のなかで、出土品の利用や活用は、もはや文化遺産関係者だけに限定されるものではなくなっている。観光開発にまで巻き込まれる文化遺産関係者という姿は常態化しつつあるといえよう。

特集 ツーリズム